

## スリランカ映画について (後篇)

為我井 輝忠

前回、スリランカ映画を世界的な存在に押し上げた巨匠レスター・ジェームズ・ピーリス(Lester James Pieris) のことと彼に触発されて続々と新しい監督が誕生したことを書きました。後編では、彼の後に続く監督たちと彼らの作品について述べたいと思います。

ピーリス監督に続く映画監督として、まず、その筆頭とも言える人物はスミトラ・ピーリス(Sumithra Pieris) ではないでしょうか。彼女はL.J.ピーリス監督の夫人で、最初編集者として映画界に入り、1978年に第1作『少女たち』を発表して、スリランカ初の女性監督となりました。第2作は『川のほとり』(1980)、続いて『砂の手紙』(1989)、『長女』(1993)、『マザー・アローン』(1997) 等があります。彼女は駐仏大使としてパリに駐在したこともあります。

1980年代は小説の映画化が活潑になり、マーティン・ヴィクラマシン原作の『ヴィラーガヤ(Viragaya)』を元にしたティッサ・アベセーカラ(Tissa Abeysekera) 監督の『蓮の道』(1987年) は難解で繊細な主人公の性格を、スリランカのスーパースターとも言えるサナットゥ・グラナティラが演じました。『Viragaya』は日本語に翻訳されていますので、読むことは可能です。先に紹介したL.J.ピーリス監督もヴィクラマシンハの三部作『変わりゆく村』、『変革の時代』、『時の終焉』を製作しています。

1990年代に入ると、スリランカのみならず第三世界の国々が抱えるギャング、酒、麻薬、売春、人種問題など様々な社会問題をテーマとした映画が製作されるようになりました。このような新しい傾向を導入したのは、1975年に監督として登場したH.D.プレーマラトゥナ(H.D.Premaratne) です。『その橋の下で』(1990年)、『大都会』(1993年) は内外の映画祭で上映され、スリランカの現代社会を

知る助けとなりました。また長い間民族紛争(スリランカ政府とタミル解放のトラ=LTTE) を題材にした『満月の日の死』(1997年) を製作したプラサナ・ヴィターナゲー(Prasanna Vitanage) 監督の存在も忘れることはできません。

去る10月末に東京で「東京国際映画祭」が開催され

ましたが、そこでスリランカ映画が上映されました。折よく見る事が出来たのは、アソカ・ハンダガマ(Aso-ka Handagama) 監督の『兵士、その後』(Him, Here After) という作品です。

ストーリーは次のようなもので、「スリランカでは30年に及んだ政府軍と反政府武装組織(LTTE)の内戦が2009年に終結した。それから2年。LTTEの兵士だった男が村に帰還する。彼はかつての恋人と再会して新しい生活を始める。村人たちの冷たい視線を受けることになる。男は運転手として雇われた先で終戦後の姿に直面していく・・・」。

監督は「子供の頃から兵士として戦闘に参加し、銃の扱い方以外は何も知らない世代にとっては、復員して“普通”の生活に戻ること自体がもうひとつの戦争なのです」と語っています。現代スリランカ映画界の鬼才として知られ、作品を発表するたびに議論を呼び起こす監督は、『マイムーン』(2001)、『この翼で飛べたら』(2002)、『レター・オブ・ファイヤー』(2005) 等、スリランカの社会の深奥を見つめた作品を発表しています。

\*アソカ・ハンダガマ監督Official Website:<http://asokahandagama.com>



スミトラ・ピーリス  
(Sumithra Pieris)



『マザー・アローン』(1997)の一場面



『兵士、その後』(Him, Here After)